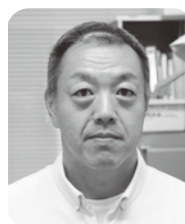




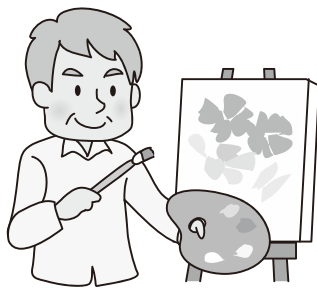
第十五回 「老年医学の現状」 高齢者医療を考える

（高齢化の進む社会を、明るく活力あるものにするために）

町立下川病院 臨床検査技師 猪 荻 冬 樹



初秋とは名ばかりで残暑が続いております。涼しい季節が待ち遠しい今日ですが町民の皆様はどうお過ごしでしょうか？今回は高齢者医療についてお話しさせていただきます。



1970年に将来、高齢化社会がくると予測され、1994年に高齢化社会といわれ、2007年には超高齢化社会となり、そして2015年の発表では人口の26・8%が65歳以上の高齢者となり、日本は世界のどの国よりも高齢化が進んでいます。

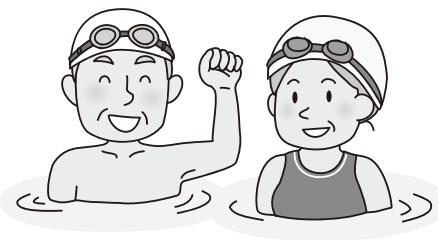
下川町の状況は、総人口3316人、65歳以上1313人、高齢者比率39・6%（北海道庁データ 平成30年1月1日付）となっております。

現在の高齢者は、10〜20年前と比較して加齢に伴う

身体的機能変化の出現が5〜10年遅延しており、若返り現象がみられています。従来、高齢者とされてきた65歳以上の人でも、特に60〜70歳の今まで前期高齢者と呼ばれてきた人たちは健康で、かなり活発な社会活動ができています。

これまで高齢者といわれていた方を、社会の支え手として、使命感を持った存在と捉えなおして、「迫りつつある超高齢者社会を、明るく活力あるものにする」ということが必要となつてきます。

ただし、気をつけなければならぬことは、高齢者の身体能力の改善傾向が今後も続くかどうかは保証されておらず、改めて次世代への健康づくりの啓発が重要ということです。



超高齢化社会が進んでい

るといわれていますが、国のデータでは入院する患者の平均年齢はここ数年、全く変わっておらず75歳以上の方が中心となっております。

2015年の75歳以上の高齢人口は12・9%ですが、2025年には20%に近づくと考えられています。そこで国は、自立生活支援を目的として、可能な限り住みなれた地域で暮らし暮らしを最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援、サービス提供体制の構築を推進しています。

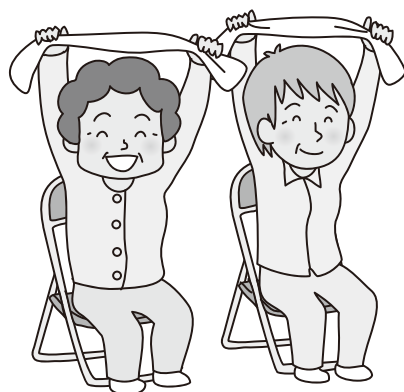


では、ということが原因で介護が必要になつてしまうのでしょうか？

その原因の中には脳血管疾患、認知症、骨折・転倒、関節疾患、心疾患、さらに動脈硬化が進むメインの疾患として糖尿病があげられるわけです。これらができるだけ無くしたいということなのです。

また、骨粗鬆症も大きな問題のひとつです。骨粗鬆症が進むと筋肉の量が低下します。骨も弱くなりますので骨折・転倒の原因となります。骨折すると生存率が5年間で約半分ほどに落ちるといわれています。

糖尿病患者も高齢化が進んでおり、年を取るとインスリンの出る量が少しずつ落ちてきます。特に食べたあとすぐに出る量が悪くなつてきます。もうひとつは筋肉量の低下です。筋肉が減って脂肪が増えるとイン



スリンの効き目が悪くなつてしまいます。このようなことから糖尿病が起きやすくなつてしまいます。糖尿病があると更に筋肉量が減りやすいといわれています。先に述べた原因の全てにおいて糖尿病はリスクを押し上げる要因となります。

これらをいかに防ぐかというところが介護負担を抑制するうえで重要だと考えら

れます。

町立下川病院は地域の皆様に支えられ、地域に密着した「かかりつけ医療機関」として、一般診療外来、入院診療、地域包括ケア、一次救急、在宅療養、リハビリテーションなど老年医学の根幹をなすような運営を行っております。

町民の皆様のお役に立てるよう尽力いたします。

（参考文献：Vita vol.34）

お問い合わせ

町立下川病院

☎・☆4-2039

